

新井白石と上総久留里の鶴姫をめぐる物語

REV.1 2023年4月10日

2020年11月2日

我部山 民樹

1. はじめに

最初に断っておくが、新井白石と鶴姫は直接には関係がない。

宝林寺の千葉公慈住職の講話を聴講するまで鶴姫のことは全く知らなかった。

そして2022年10月15日に再度拝聴した。

上総久留里城の土屋家第3代目城主頼直の狂気の行いと鶴姫の悲運の話である。1679年8月7日、家中のごたごたを聞きつけた幕府により頼直は狂気を理由に改易され、久留里城は破却された。(現在復元されている。)

俄然、注目したのが、確かに久留里藩にいた時期が一致していることだ。のちに將軍の侍講となり、幕政を実質的に主導し「正徳の治」と言われる政治改革をなした新井白石(あらいはくせき)が丁度この時期に久留里を離れ、いろいろな経緯を経て6代將軍「家宣」に巡り会い、偉業をなしている。この土屋頼直の事件との関連は？鶴姫の悲運だけでなく、新井白石も調べてみたいと思った。



2. 位置図



3. 鶴姫の辿った悲運

記憶が定かではないところもあるが、あらすじは以下のように記憶している。

- ・鶴（都留ともいう）は現在の市原市朝生村（宝林寺のあるところ）の農家に生まれる。出雲阿国のように踊りが上手で歌も上手で評判の美人であった。
- ・やがて鶴は豆腐屋の十右衛門の後妻に入った。すでに十右衛門には息子・十兵衛がいた。豆腐屋の回りには常に男どもが鶴を見に押しかけてきていた。
- ・鶴の評判を聞いた城主・土屋頼直がどうしても一目この目で見たいと言い出した。頼直はまるで志村けんさんの演ずるバカ殿様のような感じだっらしい。
- ・家老等の反対を聞き入れず、ついに鶴を遠くからそっと見に行き、鶴を見た頼直が一目ぼれしてしまう。
- ・頼直が鶴を離縁させ、鶴を城内に入れ鶴姫とし、ともに暮らすことになる。
- ・家老・青木康太夫は頼直を諫めるために切腹する。
- ・鶴姫が豆腐屋での冷たい水での豆腐づくりの苦労話を頼直にぼやいたところ、それを聞いた頼直は十右衛門を捕らえ、首を刎ねてしまう。
- ・十右衛門の息子・十兵衛は仇打ちと称し、鶴姫の命をつけ狙うようになる。
- ・それを知った鶴姫は腕のたつ武者に護衛してもらいながら宝林寺に隠れ住む。
- ・十兵衛は頼直の名前を騙って、「鶴姫に城に帰って欲しい」との手紙を鶴姫に出す。
- ・手紙を真に受けた鶴姫が城に向かうところを十兵衛らに切られて絶命する。鶴姫に同行していた鶴姫の兄も背中を切られたが、生き延びて江戸城に訴え出る。
- ・この不始末を知った幕府により、狂気を理由に土屋家を改易し城も破却した。しかし祖先の功績なども考慮して、頼直の弟に遠江国内で 3000 石を与えた。その後も土屋家は旗本として存続した。頼直はこの弟の下で余生を送り、48 歳で死去する。

まるでドラマにでも出てきそうなこの事件は「久留里土屋三代記」（君津市立久留里城址資料館）並びに「土屋家ノ御尋ニ付奉答候条々」（国文学資料館）に記されているそう。その資料を読みたいと思ったが、講話の簡単な資料に原本の写真が添付されていたのが分かり、恐らく現代語訳版は無いと思い諦めた。古文書はなかなか読めない。何度か、古文書の読み解き方の講義に参加したことがある。講師より「慣れただけだ」と言われるのだが、自分には難しい。

いずれその関連の現代語版が発表されることを期待し、鶴姫事件はここまですし、興味の湧いてきた白石を調べることにする。白石が久留里藩の人とは知っていたが、藩を出た経緯は知らなかった。

4. 新井白石にまつわる主な出来事

1677 年	新井正済・白石親子は第 2 代藩主・利直には重用されていた。正済退職の後、利直が死去し、頼直が代を継ぐが、頼直は先代が重用していた家臣を遠ざけるようになった。そのような時に白石は内紛に
--------	--

	巻き込まれた結果、追放され禁固の件に処せられる。家禄も白石は取り上げられたので貧乏を味わうが、忍耐の座につきながら儒学・史学に励んだ。
1679年8月7日	家中のごたごたが幕府の耳に入り、頼直は狂気を理由に改易となり、城は破却された。長男が遠江国内に3000石を与えられ、土屋家は旗本として存続。頼直は長男の下で余生を過ごす。
1681年	頼直死去
1683年	頼直の改易に伴い、自由の身となった白石が藩から出て大老堀田正俊（まさとし）に仕える。正俊が白石の評判を聞きつけたのだ。
1684年	堀田正俊が若年寄・稲葉正休（まさやす）に殿中で刺殺される。堀田家は次ぎ次ぎと国替えさせられ、藩財政は困窮を極めたので、白石は自ら退く
1686年	白石は独学を続けていたが、江戸の朱子学者木下順庵に入門
1693年	順庵のすすめで甲府藩主徳川綱豊に仕える
1712年	綱豊が7代将軍になり、家宣と名を改める。白石は旗本になり、将軍の侍講（主君に仕え、講義し、君徳を養う役目）となる。御側御用人（おそばごようにん）・間部詮房（まなべあきふさ）と共に幕政を実質的に主導した。白石が頭脳となり、家宣が間部詮房を通じて諸大名に命じたのだ。幼君の7代将軍家継の時代も引き続き幕政を主導した。
1716年	吉宗が8代将軍に就任すると、新井白石と間部詮房は罷免された。このごろ、白石が随筆「折たく柴の記」を著述。

5. 白石の略歴

新井白石は江戸時代の旗本・政治家・朱子学者。
 木下順庵の弟子となり朱子学を学んだ。順庵のすすめで甲府藩主徳川綱豊（のちの第6代将軍徳川家宣）につかえた。家宣が将軍になると幕臣にとりたてられ、家宣の政治を助けた。一介の無役の旗本でありながら6代将軍家宣の侍講として御側用人・真鍋詮房とともに幕政を実質的に主導して正徳の治と呼ばれる一時代をもたらす一翼を担った。「幕政の鬼」とか「江戸城の鬼」とか言われるほど、次々と改革の断を下していった。家宣の死後も幼君の7代将軍徳川家継を間部詮房とともに守り立てたが、政権の蚊帳の外に置かれた譜代大名と次第に軋轢を生じ、家継が夭折して8代将軍吉宗が就くと失脚し引退、晩年は著述活動に勤しんだ。有名な「折たく柴の記」は自叙伝であり、随筆であるとも言われている。（引用）

新井白石像→
(久留里城内)



6. 「正徳の治」の政策

- ・ 正徳金銀の鑄造
勘定奉行・萩原重秀が慶長小判の金の含有量を少なくし、数を増やしていたが、元の含有量に戻す。
- ・ 海舶互市新令の発布
貿易により金銀が海外に流出するのを防ぐために貿易額を制限する。
- ・ 閑院宮家の創設
皇統の断絶を恐れて新たな宮家を創設
- ・ 朝鮮通信使の簡素化

7. 西洋紀聞

宝永5年（1708年10月）、イタリア人宣教師シドッチェが屋久島に上陸し、長崎を経て翌年江戸に移送されてきた。その頃幕府の要職にあった新井白石は、数回にわたってシドッチェを尋問し、それにもとづいて幕府として取るべき措置を上申した。それは三つの選択肢からなっていて、本国送還を上策、換金を中策、処刑を下策としていたが、幕府がとった措置は中策の監禁であった。シドッチェは茗荷谷の切支丹屋敷に監禁され、1714年10月に死んだ。

「西洋紀聞」は、「シドッチェとのやりとりを簡潔に記したものである。三巻からなり、上巻はシドッチェが密入国してから江戸へ移送されてくるまでのいきさつ、中巻は世界地図をもとにした世界情勢の把握、下巻は白石とシドッチェの間で交わされた問答の概要を記している。白石はこの記録を私的なものとして作成し、積極的に公開する意図は持たなかったが、幕府から求められれば提出するように遺言していた。その遺言に従って幕府に献上されたのは三世の孫成美の時である。（引用）

8. 最後に

鶴姫はただ悲運というより表現のしようが無い。新井白石は土屋頼直が改易されたからこそ自由の身になれて、大老堀田正俊に仕えることが出来た。その後いろいろな経緯を経て6代将軍家宣に巡り会うことが出来た。頼直の度の過ぎた狂気で改易されなければ新井白石の歴史に残る政治改革「正徳の治」の活躍は

無かった。頼直は狂気の振る舞いがあったにせよ、並外れた美貌の鶴に出会わなければ改易されるほどの事件は起こさなかっただろう。

「鶴姫がいなければ新井白石の‘正徳の治’と呼ばれる歴史的な幕政改革が無かったと言えるかも知れない」との御住職の話に合点がいった。

早く、「久留里土屋三代記」（君津市立久留里城址資料館）並びに「土屋家ノ御尋ニ付奉答候条々」の現代語訳本か、物語を読みたいものだ。

因みに、久留里の町は自噴水井戸が多い。地下水が天然ガスに押し出されるのだろう。ここらは天然ガスでも有名だ。水源は富士山の伏流水だと聞いたこともある。この水が久留里の栄えた理由のひとつであり、きれいな水が豊富だから、この付近に造り酒屋が5軒もあるのだろう。見学させてくれる酒屋もある。

以上



久留里駅前の自噴水井戸